

## 金森修 『＜生政治＞の哲学』

木 下 慎

### 1. はじめに

本書に通底する狙いは、フーコー、アーレント、ネグリ、アガンベンといった生政治の思想家に伏在する反自然主義の哲学を析出し、著者なりの反自然主義を練り上げることにあった。このことの裏を返せば、生政治学の批判的な視座は反自然主義によって支えられているということの意味する。従って、本書の哲学的な態度を読み取るためには、反自然主義と自然主義の対立関係を正確に把握する必要がある。

しかし、反自然主義の規定を本書から明確に取り出すにはいささかの困難を伴う。というのも、まず自然主義と反自然主義について、最初から最後まで一貫した定義が採用されている訳ではないという議論構成上の複雑さがある。もちろん、それは理念を先行させることで議論の広がり失われることを回避しようとする、本書に一貫した態度と相関している。

他方、著者も強調しているように生権力を批判的に描き出すはずの反自然主義的な態度それ自身のうちに、優生学的な生権力に反転しかねない逆説的な危うさが潜在しているためでもある。ゆえに、反自然主義には「生」を否定しかねない危険性があるといった危惧を、本書を通読した読者が感じるのはあまりに当然のことだ。反自然主義の危うさ、それは既に著者が先取りし、強調さえしている論点である。

だからこそ、読者は議論をそこに留めてはならない。問われるべき点は、一定の振幅をもった反自然主義の規定のうち、どのような成分にこそ危うさが潜在しているのか、その成分が反自然主義にとってどのような位置を占めているのかを明確にすることにある。反自然主義の可能性と背中合わせになった危険性を正確に見抜いたうえでこそ、その処方箋を導くことができるだろう。

本稿は、そのような観点から、以下の2点について考察を加え、本書読解のためのささやかな道筋を

示したい。第1に、反自然主義の規定を、一般的な哲学的議論としてではなく、本書に内在的な立場から明らかにすること。第2に、反自然主義の立論の危うさとその対処について、検討を加えること。これらの点を明確にすることで、反自然主義の射程をいささかなりとも計測することができるだろう。

### 2. 本書における反自然主義の規定

本書で、最も明確な反自然主義の規定が最初に示されているのは次の箇所である。

反自然主義とは、概略的には、自然科学的な知識生産様式、並びにその結果獲得される自然科学的な知識を、他領域の知識群がそれを模範とするべき準拠と見なして構わないとする考え方、そして他領域の知識群がたとえ現時点では自然科学的ではないにしても、遅かれ早かれ自然科学的知識の様式に近づいていくという考え方を否定する思想のこと (p.53)。

なお、ここで言及されている、反自然主義の否定的対立項として示されている自然主義は、具体的には、1970年代以降にアメリカで発達したバイオ・ポリティクスやポッターのバイオ・エシックスなどの諸潮流を指している。他方、反自然主義の側には、フーコー、アーレント、ネグリ、アガンベンが位置づけられる。

引用箇所における、反自然主義の規定の要点は、自然科学を特権的な知識モデルとしては認めないことにある。著者は、フーコーの真理論についての記述箇所、知識の獲得には常に認識の格子が介在するため自然をそのまま反映したような真理はありえないということ、したがって自然科学的な真理および真理観はあくまでひとつの真理のタイプに過ぎないことを確認し、自然と自然科学的知識の間に切断線を引いている (p.59-61)。ここで反自然主義

は、自然と知識の乖離を主張し、知識から絶対的な基礎づけを剥奪するものとして捉えられている。

ちなみに、反自然主義の規定が議論の展開に従って拡張されていくにも関わらず、ここで反自然主義が何よりも自然科学批判として明確に措定されていることには、理由がある。それは、現代の生権力が、自然科学の急速な発展に支えられて作動しているからだ。本書第2部「〈生政治〉の現在」で具体的に検討されている通り、20世紀にはバイオ・サイエンスとバイオ・テクノロジーが急激な進展を見せ、それと並行して軍事利用・産業利用が進められている。このような情勢を批判的に捉えるためには、自然科学の真理性そのものから距離をとるような態度が必要ということだ。

さらに著者は、自然科学的な真理性の問題に留まらず、人間の実践一般と自然との間に切斷線を引くものとして、反自然主義の規定を拡張している。ここで反自然主義は、自然主義の根底にある「歴史や文化、存在の多様な発現形態の究極的な根拠は自然の論理、自然のあり方に基づいている」(p.81)という見方を批判するものとして捉えられている。自然の認識もひとつの実践に他ならないだろうが、それに限られない人間の多様な実践も、自然の論理だけでは説明できないという訳だ。

自然と実践が分離していることについて、著者はネグリと反自然主義の関係を論じた箇所、2点ほどその根拠を挙げている (p.109-112およびp.277の注32)。第1に、人間の実践過程で何か超自然的な事態が発生しているのではないにしても、実践に伴う表象や意図、意志、欲望、規範を自然 (例えば、脳の生化学的なプロセス) に還元して説明したところで、その説明は説得的な内容をもたないということ。つまり、人間の実践を自然現象のレベルに変換して説明することができるとしても、実践の諸相を別の仕方を取り出すことができる以上、自然現象が全てを説明していることにはならないということだ。第2に、人間は自然に介入し、歴史的に自然を改変してきた以上、もはや「自然」と「人為」を明確に区分はできないということが言及されている。自然は既に改変を受けているか、いつでも可能的な介入の選択対象となっている。

労働とその製品、そして製品を使う人間生活の、それぞれの存在論的基盤としてあるはずの〈自

然〉の規定性・自己同一性が、人間活動の過程を通して大きく揺らぐとき、労働・製品・生活の全体が一連托生のままに、自然から微妙に切り離されていく。しかも、労働・製品・生活の変貌過程を嚮導するものは、自然ではなく、欲望であり、規範であり、意志なのだ (p.112)。

この引用箇所以上で以上の点が端的に主張されているのが分かるだろう。もちろん、あくまでネグリと反自然主義の関係を論じているこの主張を、著者自身の反自然主義と同一視することはできない。しかし、その点に留意したうえで、上の主張と著者自身の立場とが差異化されている訳でもない。ここでの反自然主義は、自然と実践一般との乖離を主張し、実践の絶対的な基礎づけを剥奪するものとして示されている。

自然と実践の分離は、アガンベンの統治性論を検討することでさらに拡張され、「存在」と「実践」の分離として提示し直される。アガンベンの展開する神学の議論と今までの交差させることで、自然は神とともに「存在」の位相に置かれ、「実践」、とりわけ政治的实践と切り離されることになる。ここに至り、自然主義は「統治のあり方の是非や正当性を自然という根拠に最終的には収斂せしめる考え方」(p.253)を意味することになる。それは、人間の政治的实践が自然あるいは神の定めた規則性に基づいているという事実的な判断と、政治的实践がその規則性に基づくべきだという規範的な判断の双方に跨っている。そして反対に、反自然主義は、政治的实践(いかになすか)と存在の構成(いかにあるか)とが別の次元にあるとする考え方を指すようになる。

反自然主義をこの点にまで引き延ばすことによって、反自然主義がもつ政治的含意がより明らかになる。

存在から離された神の意志、神の実践は存在の安定性という基盤をもたない浮動的なものになる。超越的で永遠不動の原理は、被造物の内在的秩序との間の、当然そうであるはずの直接的連続性を破壊される。この根源的な不安定性を抱え込む以上、世界をどのように統治するのかという問題は、言葉の十全の意味での政治的含意を獲得するのだ (p.164)。

何らかの規則や手続きによって政治のアウトプットが決定されるならば、政治的決定は不要である。政治とは、そのような規則や手続きによって規定されえない位相にこそ、自らを展開させるものだろう。そうであれば、存在と政治的实践を切断する反自然主義は、「政治的なもの」と重なってくる。反自然主義が孕む政治性は、真理の絶対的な基礎づけを剥奪した時点で既に作動しているが、反自然主義が政治的实践からも安定性を奪うことを明示するに至って、その十全な展開を見せたのである。

以上で示されたように、反自然主義は、真理の認識と実践一般、とりわけ政治的实践において、自然に絶対的な基礎づけを求めることを拒否するものとして規定されている。ただし、それだけであれば反自然主義の危うさは不安を煽るものであっても、不穏なものではない。しかし、本書における反自然主義は以上のような規定に尽きるものではない。

反自然主義に不穏なものを感じさせるのは、アーレントとプラトンを軸に導かれる、もう1つの成分による。それは、生命を至高価値とはしないこと、より強く言えば、生命への過剰な執着を「くだらないこと」として捉えるものとしての反自然主義である(p.81-4およびp.245-261)。アーレントおよびプラトンの主張によれば、人間は自然の必然性に囚われることを嫌い、必然性からの自由を求める。そのような見解を肯定的に受けとめながら、著者は次のように言う。

人間の人間たる所以は、生物としての人間が、いろいろな社会生活の果てに結局生物的存在として自認するに至るということにあるのではなく、生命からの超脱、離脱、蟬脱を少なくとも試みようとし続けるというところにある (p.82-3)。

ここでいう反自然主義は、反自然主義の否定する絶対的審級としての自然を「人間の自由に対立する必然性としての自然」として「自由」対「必然」という対立軸に置き直す。そして、「必然性としての自然」という変数項に生命を代入し「人間の自由」と対立させることで、生命の至高性を拒否するものである。

そして著者は、このような反自然主義の成分を、生政治の哲学を支える主要な要素と見なす。本書の結論近くに置かれた、次の記述がそれを示している。

<生政治学>は<生・政治学>であるにもかかわらず、自然な意味での<生>を全体の中心には置かないという逆説的含意を持たなければ、これほど多くの人々の注目を引くことはない、と私は確信している (p.245)。

現代の生権力は人間の生物学的な生を捕捉し、生の尊重という価値を動力に勢力を拡張させる。ゆえに、「生の増進」というポジティブな要素を併せ持つ生権力から批判的な距離を確保するためには、<生>そのものから一度、身を引き離さなければならないのである。

しかし、生を相対化する態度は危うさを秘めている。そのような危うさを顕在化させた例として、著者はプラトンによる次の記述を引用している。

内部のすみずみまで完全に病んでいる身体に対しては、養生によって少しずつ排泄させたり注入したりしながら、惨めな人生をいたずらに長びかせようとは試みなかったし、また、きっと同じように病弱に違いない彼らの子供を生ませなかったのである (p.250)。

著者はここに反自然主義のもつ優生学的思考への傾斜を見出し、自戒を込めて、読者に注意を喚起している。生政治学の批判性を支えるはずの反自然主義が、むしろ自由を奪う優生学的な生権力へと転化する可能性を持っているということに。

ここからはより慎重な議論が要される。まず、生命から距離をとることと、生命を廃棄することには、差異がある。著書もここでのプラトンの主張は「生きるに値しない命」を殺せというよりも、「真に生きるに値する生き方をしろ」という薦めにあったことを確認している。

著者に続いて、さらに慎重な検討を加えるならば、生命の価値の至高性を否定することは生命の価値を否定することとは等値ではない。また、プラトン／アーレント的立場からして、必然性からの超脱を実践し続けるためにも、必然性としての生命は基礎的な条件であり続ける。さらに、労働を必然性の延長として捉えるアーレントとは異なる立場に立つ反自然主義者であれば、生命をさらに延長するために生命に技術的な介入を行う態度は、むしろ必然性に抗う反自然的な態度として捉えることも可能であらう

う。動物が自らの生命を保とうとするような態度を自然的と呼ぶならば、自らの生命に「至高性」を付与する人間の態度は自然的ではない。反自然主義の主張するように人間が自然から切り離されているならば、それにも関わらず自然および生命に至高性を付与しようとする自然主義者の態度こそ、遂行的レベルでは、倒錯的という意味で反自然的である。

さて、著者の危惧を踏まえて、以上の検討によって、生命の至高性を認めないという反自然主義の成分が持つ優生学的な傾斜をできる限り希釈しようと応急措置を試みた。反自然主義の危うさについては次節で詳論する。その前に、本節で辿ってきた本書における反自然主義の規定について今一度考察を加えよう。

第1に、反自然主義とは、自然と認識の間に必然的な繋がりを認めず、自然科学的な知識モデルを相対化するような態度であった。それは真理性を廃棄することなく、その相対性を認める。第2に、自然＝存在と実践一般との間、とりわけ政治的実践との間に必然的な繋がりを認めず、存在による実践の絶対的な基礎づけを拒否する態度であった。それは政治的実践の妥当性を廃棄することなく、その相対性を認める。第3に、必然性としての生命と人間の自由との間に必然的な繋がりを認めず、生命の至高性を拒否する。それは生命の価値を廃棄することなく、その相対性を認める。これらのまとまりを、本書では反自然主義と呼んでいる。このような意味での反自然主義は、生命の至高性に準拠し、自然科学的真理性を盾に、政治的実践を正当化するような生権力の作動に対して、批判的な分析を差し挟むことを可能にする視座を切り開くのだ。

では、それほどまでの位置価値を与えられた反自然主義そのものについて、哲学的に突き詰めた議論が、本書において敢えてなされていないのはなぜか。それは、本書の意図があくまで、反自然主義の論理構成よりも、批判的エートスとしての反自然主義を明るみに出すことにあるからだろう。反自然主義を単なるロジックとして議論してしまえば、反自然主義は空疎なテーゼに墮しかねない。いまここで目の当りにしている反自然主義とは、フーコー、アーレント、ネグリ、アガンベン、そして著者自身に通底する、「政治的質感」であり、「生のスタンス」であるときえ言い換えられるものだ。自明性と必然性を徹底的に疑い、認識と実践の条件を綿密に記述しよう

とする態度。必然的な決定を可能的な選択へと差し戻そうとする自由への情念。著者の言葉によれば、それは「<存在>と<実践>との間の根拠づけの糸を可能な限り細くし、できることならたとえ一瞬しか続かなくても、両者を一瞬断ち切ってしまいたいという企図の表明」(p.253-4)であり、「根なし草の生」(p.254)のスタンスである。

### 3. 反自然主義の立論の危うさ

次に、先ほど保留しておいた、反自然主義の立論の危うさを2点に分けて論じる。第1に反自然主義が生命の否定への傾斜を持つことについて、第2に反自然主義が生権力の統治性を招来する可能性を持つことについて検討する。

最初の問題点については既にいくつかの検討を加えた。反自然主義は、必然性からの超脱を肯定するために、それが必然性の重荷としての生命を否定してしまいかねないという問題である。先ほどは、そのような急な展開に対抗する主張として、自由の肯定は必然性としての生命の否定とは力点を違えること、生命の技術的維持は死という必然性への抗いでもあること、生命への至高的価値の付与は自然的というより文化的な営みとして遂行的に自然主義から区別されうることなどを指摘した。

しかし、恒常性を維持しようとする生命の営みに必然性の重荷を見て取る限り、死という可能的選択への傾性はいつまでも付きまとう。反自然主義は、自然の傾性から身を引きはがすことで獲得した、新たな傾性＝傾斜から、今度はいかに身を引きはがすのか。

本書には、明示的に考察されてはいないものの、既にその糸口が示されている。第1に支配されうる側の抵抗として、第2に支配しうる側の傾聴的な態度として。ここでは後者を主要なものとするため、前者については触れるに留める。前者は、人間は支配に対しては高い蓋然性で主体様の抵抗を示すという事実性、およびそのような抵抗を完璧に封殺することのできない生権力の不確実性を根拠にしている。具体的事例としては、ベスト流行を抑えるための監視システムのもとでも監視の網の目を抜け出ることになった感染者や、科学的な知見を逆手にとって大企業を相手どった公害訴訟を展開した市民活動家などが挙げられている。支配のあるところに

抵抗があるというフーコーのテーゼを鑑みるまでもなく、この論理は見て取りやすい。しかし、抵抗の可能性は、生命を否定する側に内在的な論理ではない。

そこで、注目されるのが後者の議論である。本書にはいささか他のコンテキストから浮き上がった文章が挿入されている。それは、<森の散策>という生過程についての、アガンベンの記述である。『言語と死』(1997)から引用されているアガンベンの文章を孫引きしよう。

ぼくらが森を夕暮れ時に歩くと、一足ごとに道端の藪の中に見えない動物たちが逃げていくのが聞こえる。トカゲやハリネズミ、ツグミやヘビなど、いろんな動物がだ。ぼくらが考えるときにも、実はそれと同じことが起きている。大切なのは言葉で横切る行程ではない。大事なのは、ぼくらをかすめて通っていく混乱した物音だ。ちょうど逃げ去る動物のように、あるいはぼくらの足音で目覚める何かのように (p.186-7)。

ここで藪の中に登場している「見えない動物たち」とは、人間の生の形式には回収されない、自然という「存在」、単なる生の事実性を表していると解釈することができる。散策者たる人間は、道を辿る、すなわち言語を介して思考の条理を構成する過程で、言語的思考には回収されない存在の物音に耳を傾けている。著者は、アガンベンのこのような傾聴の態度を、「敬神的な態度」、「超越的なもの一般への心遣い」と表現している (p.185-6)。

反自然主義は自然と人間のつながりを切断するものであったのだから、反自然主義の立場からすると、散策者は自然への懐古的な憧憬を抱いているに過ぎないように思われる。しかし、散策者の生を、自然回帰と同一視してはならない。

今の私に厳密な議論は展開できないが、比喩的に次のようには言えるかもしれない。森の散策者が動物たちの物音に耳を傾けるような生過程のうちに、反自然主義の抱える生命否定の傾斜を抑止する何かがありはしないかと。必然性を可能的選択に変えつくしてしまえば、非言語的な存在を言語へと変換しつくしてしまえるならば、自由の実践に残された余地はない。必然性から逃れることが他者との多様な交流を開き、他者の存在が必然性からの超脱を喚起

するというときに気付くとき、「自由」と「必然」、「人間」と「動物」、「言語」と「声」といった思考を拘束する排他的な二項対立を、人は脱することができるのではないか。ヒトが森を出て都市に住むことで<根なし草の生>を生き始めたという物語に沿うならば、人が都市に住み続けるいわれはない。人は都市を折り返し、森へと散策するだろう。もちろん、それは自然回帰を意味しない。動物と直接的に触れ合うことを意味しない。それは<根なし草>の生が抱え込む限界線に触れ、境界線を維持したまま、それを更新しようとする態度である。浮動する生を、散策する生として、生きること。「装甲するビオス」の重々しいイメージは、いまや軽やかに森を歩く「散策者」へと転換している。著者の言説空間はアガンベンの言説空間に触発されて、人間的な生の境界へと散策を始めている。

次に、本書で開示されたもう1つの危うさ、反自然主義が生権力の合理性とテクノロジーを招来する可能性を検討して、本稿を閉じよう。先に本書における反自然主義の規定を見たときに、反自然主義は存在と政治的实践を分離し、政治的实践から絶対的な基礎づけを剝奪することを確認した。しかし逆説的なことに、そのような切断によって導入された実践の不安定性を解消するためにこそ、統治のための様々な技術と言説が繁茂することになる。著者は、その逆説を突いたアガンベンの統治性論の特徴を次のようにまとめる。

統治は、存在(支配)の安寧性と自同性をもたず、存在との間の微妙な亀裂を前提とした上で、その不安定性のゆえに、同一位相での事象間の調和や調整に技巧的な技術を凝らす。それは不安定で根拠薄弱であるからこそ、その周縁に自由や偶然を介在せしめることもできる (p.182)。

確かに、反自然主義は政治的实践から基礎づけを剝奪し、絶対的な支配を不可能にする。しかし、その一方で基盤なしの政治的实践に不安感を募らせる人々は、不確実性を縮減するために統治の合理性とテクノロジーを希求する。自然主義の言説が政治領域に浸食し、一定の幅を利かす背景にも、反自然主義のもたらし寄る辺なさがあるかもしれない。

もちろん、反自然主義の立場に立つ限り、常に異議申しての可能性は開かれている。統治に絶対的な

根拠は存在しないのだから、特定の統治性が絶対的な正当性を僭称しようものなら、反自然主義者は絶えずそこに異議を差し挟むだろう。

つまり、生権力が展開する空間は、一方でその統治の合理性や妥当性をめぐって常に変転する可能性を保ちながら、他方で動的な生政治から生権力の固定的な支配体制へ向かう傾性を常に潜在させることになる。いくなれば反自然主義は生政治のゲームのアクターが最終審級へ訴えることを禁じることで、政治的実践の合理性と妥当性を争う生政治のゲームを起動させるのだ。

しかし、最終審級の呼び出しを禁じ手としてゲームのルールに初期設定することは、あくまで内在的な地平に留まる反自然主義の立場からして、貫徹しえない。従って、存在と実践の乖離は、その糸を切

断するという身振りの反復によってだけ、維持される。「人間は根底的に根無し草である」という言明が人間の存在規定であるならば反自然主義は矛盾する。そのような言明はあくまで反復されなければならない。自然主義者が生政治に絶対的な審級を挿入しようとする度ごとに、反自然主義者はその糸を切断するために声をあげねばならない。

しかし、そのような不安定性に反自然主義自身は耐えることができるのか。その不安定性に怯え続けることなく、「根なし草の生」を貫徹するためには、反自然主義を生スタイルとして磨き上げることが必要なかもしれない。例えば、「生」から批判的距離をとり、ゆえに「生」へと耳を傾けられる、そのような「散策者」の生き方を。